特集

地域住民の立場から、子どもの健全育成を見守り支える

# 子育て地域のわ

## 和・話・輪

## 最近、近所の子どもと話しましたか？

「子どもの姿を見かける機会が減った」――取材の先々で耳にする、そんな声。少子高齢化や核家族化、暮らしの変化……。子どもたちを取り巻く環境が変わるにつれて、子育ては家庭と学校の中に閉じこもり、孤立化が進んでいるといわれています。地域の未来を担う子どもたちは、いわば「地域の宝物」のような存在。今号の特集では、地域住民の立場から子どもたちの健やかな成長を支える、温かな「わ」の存在に注目します。



▲ある日の小学１年生の算数の時間。先生が出題した問題の答えを、自分なりに「ああでもない」「こうでもない」と考える児童たち。その姿を、学校支援ボランティアが温かく見守ります。

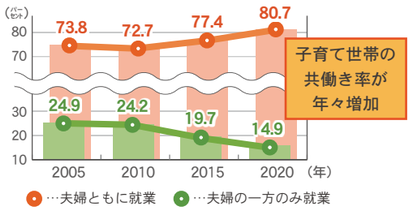
### 進む家庭環境の変化 減少する地域内交流

家庭や学校の温かな支えの中、すくすくと育つ子どもたち。今、その子どもたちを取り巻く環境に、大きな変化が起きています。

かつては当たり前だった、学校から帰った時の家族からの「おかえり」の声。公園などで遊ぶ時も、近所の大人が声をかけたり、気にかけたりするような、地域の目が日常の中にありました。また、近所付き合いや地域行事を通じて多様な人と関わり合う中で、子どもたちは少しずつ社会性を身に付け、成長していくものでした。

しかし現在、核家族化や世帯分離の進行により、祖父母など、親以外の大人が子育てに関わる機会が減少。共働き世帯の増加で保護者は多忙を極め、時間的にも精神的にも、地域活動に参加する余裕がなくなってきています。さらに、少子化などを背景に、子ども会活動や地域行事も縮小傾向に。その結果、多世代が自然と顔を合わせる機会が失われ、子どもたちは意識的に外に目を向けない限り、家庭や学校の限られた人間関係の中に閉じこもってしまう状況が生まれています。

■市内における子育て世帯の就業状況推移



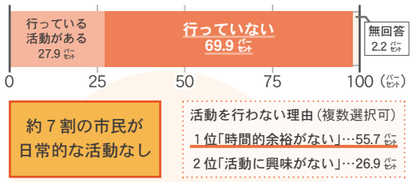

出典：総務省統計局「国勢調査」
対象：市内の一般世帯のうち、夫婦がいて、かつ18歳未満の子どもがいる世帯

### 社会を生き抜くために求められる多世代交流

一方、現代の学校教育では、「総合的な学習の時間」などを通じて、地域や社会の課題に主体的に向き合い、探究する学びが重視されています。これは、変化の激しい社会を生き抜くためには、子どもの頃から多様な価値観や生き方に触れることで、他者と協働して課題を解決する力や、さまざまな情報を整理・分析して新たな価値を創造する力を育んでいくことが重要だからです。子どもの健やかな成長のためにも、地域のつながりを、時代に即した形で新たに生み出していくことが、今改めて求められているのかもしれません。

これからの時代、私たちは子どもたちとどのように関わっていくべきでしょうか。時代が変わっても、子どもの成長のために大切なものは変わらないはずです。地域住民の立場から、子どもを支えようと尽力する人たちの活動や思いに迫り、地域ぐるみで子どもを育てる重要性を探ります。

■市民が日常的に行っている活動（文化芸術、生涯学習、市民活動など）の有無




出典：「登米市（仮称）地域交流センター整備事業に関する市民アンケート」
対象：18歳以上の市民3,000人（無作為抽出）実施期間：令和６年９月13～30日